



祐介の目

No.138

大田祐介 (福山市議会議員)

水深を下げる、落ちた時に這い上がれるよう手摺を設置する、子供に危険なことを周知(教育)する等、様々な意見が出た。この水路には魚が多く、子供が興味を持つのは当然だが、昔のように釣りや魚取りをするような子供はいないし、近所の大人による監視の目も少ない。

私は岡山市の児島湾干拓地の農家に生まれたが、周囲は一面水田であり水路が縦横に張り巡らされていた。3歳の頃に家の前の水路に転げ落ちたところを父に引きずり上げられた記憶がある。

昨年11月に4歳児が緑町公園南側の「三間川」に転落して死亡した。16年前にも6歳児が転落して死亡していることを受け、福山市は有識者による水路転落事故防止対策検討会が立ち上げた。私も地元町内会代表としてオブザーバー参加している。この水路は三間(約5・4m)の幅があり底が見えるくらい浅かったが、約30年前に水路脇の道路を拡張し、幅を2mに狭め流量を確保するために水深を深くした。子供が転落した場所には水門があり、ゴミを回収するために柵が無く水深も1・4mあった。

検討会では、水路に近寄れないようにフェンスで囲う、

最近の子供の自然体験は減少の一途であり、危険予知能力やいざという時の対処能力を身に付ける教育が必要だ。そのための公園管理人の常駐を提案したい。あれはダメこれもダメという管理人ではなく、子供に遊びを教えるプラーリーダーが必要だ。私は東京都世田谷区にある羽根木プラーパーク(冒険遊び場)に行ったことがあるが、自分の責任で遊ぶことを前提にした自由な遊びができる。泥遊び、ロープブランコ、焚火、ナイフで工作、落葉プールなど都会ではなかなかできなくなった遊びを通じて、子供の自主性や冒険心を育てていた。今回の事故を教訓として緑町公園をプラーパークに衣替えし、子供たちの生きる力を育む場所にするのが、亡くなった子供たちに対する何よりの供養と今後の事故対策になるのではないか。